

絵は心の手紙です ―「かまぼこ板の絵」物語―(その3)

西予市立美術館「ギャラリーしろかわ」元館長 浅野 幸江



(応募作品より)

出会ったことと忘れない

10年振りに、かまぼこ板の絵の展示をした。

第30回「全国『かまぼこ板の絵』展覧会」の「かまぼこ板の絵30年の物語」コーナーを引き受けたのだ。

資料集めには時間をかけたが、かまぼこ板の展示は3日ほどで完成。私が現職当時に、一緒に頑張ってくれた元スタッフの女性が手伝ってくれた。

「あうんの呼吸」というのだろうか、私が床にレイアウトした作品を私の思いどおりに壁に展示してくれ、体が覚えていく感覚に10年というロスがなかったこ

とはふたりの驚きだった。

32年前、ギャラリートークの講師から「お土産…何にもないんだけど…」と、かまぼこ板に描いた厚塗りのピエロの絵を貰った。私の手のひらに乗ったその作品にびっくりし、「かまぼこ板がルーブルになつとる!」と叫んだ私。この感動が展覧会になった。

勿論、予算はゼロ。賛成してくれる人もいなかった。

でも、なぜか夢が叶うような気がして笑顔だった。

美術のことも展覧会というものも、何にも知らない私が「かまぼこ板の絵の作



第30回展覧会ロビー

品」に感動し、これをカタチにしたい：とスタッフを巻き込んでしまったのだ。

そんなことで、毎日毎日、未経験の難題との対決。でも、この事が「面白かった」という不思議な感情の連鎖。

本当に、全国にかまぼこ板の絵展ポスターとチラシをばら撒けば、作品が集まるのではないか……ぐらいな発想だった。

国民1億2千万人のうち、1万人が作品を描いてくれれば「1万人の美術展」ができるはず…と。

これが「かまぼこ板の絵第二の人生物語」の出発だったのだ。

「かまぼこ板に描いた絵なんかを美術館に展示すると、美術館が汚染する」とまでの反対に、こんな提案をした。

人に個性があるように、「まち」には、その「まち」の個性があります。

「ギャラリ―しろかわ」は、その「まち」の文化(個性)の核になりたいと努力しています。

「まち」の個性を表現することこそ活動であり、地域情報の発信だと思っています。

活力(行動)こそ最大のエネルギーであり、その「まち」の存在証明(アイデンティ

ティ)といえるでしょう。

「誰でも、どこでも、いつでも自分を表現できる」というチャンスを与えることは、人の個性の輝きにチャンスを与えらるとともに、城川町の個性の再確認になると思います。

文化活動は、経済効率最優先主義ではなく、その土地で「生きる」豊かさの追求の中に答えがあるもののような気がします。

21世紀を目前にして「今、ここで生きる楽しみ」を支援する、それこそが必要な時代かもしれません。

「かまぼこ板の絵展覧会」を通して、地域イメージの向上と交流が活発になり、今以上に元気な城川町になれると確信しています…と。

いざ！出発。

ポスター5千枚とチラシ23万枚は、「出世払い」の契約で高知のデザイン会社が引き受けてくれた。今でも、この企画の火ぶたは「こじやんと、えい企画やきにまかいちよってや！」という土佐弁で切られた、と思っている。

ホント…スタッフ4人、タライに乗っ

て太平洋に漕ぎ出したような始まりだった。

誰でも応募さえすれば、自分の板の絵が美術館に飾られる、そのことが「美術館の敷居を下げ、みんなの美術館」になれると思い、それが勇気にもなり、前に向けたんだと思う。

全国への発信は、ポスターとチラシにこんな思いを添えた。

「かまぼこ板」に絵を描いてみませんか。

絵は誰でも、いつでも、なんにでも描けます。

絵は人間が一番最初に手にした、最高の心の表現です。

奥伊予城川町では「わがむらは美しく」運動によるまちづくりの文化活動の一つとして、自然と人との関わりあいの中で「木のぬくもり」に安らぎを求めた先人の優しさを知恵、それから生まれた文化を見直し、改めて自然を大切にしたいという思いから「100万人との出会い、『1万人の美術展』——絵は心の手紙です——かまぼこ板の絵」展覧会を企画いたしました。

かまぼこは、木(山の幸)と魚(海の幸)のハーモニーからなる食文化の芸術品です。

この企画は、かまぼこを食した後、残った板の上に絵を描いていただき「木のぬくもり」の上に感動(人生)をのせた作品を、町立美術館「ギャラリーしろかわ」(城川町当時)に展示し、文化の交流を図りたいと募集するものです。

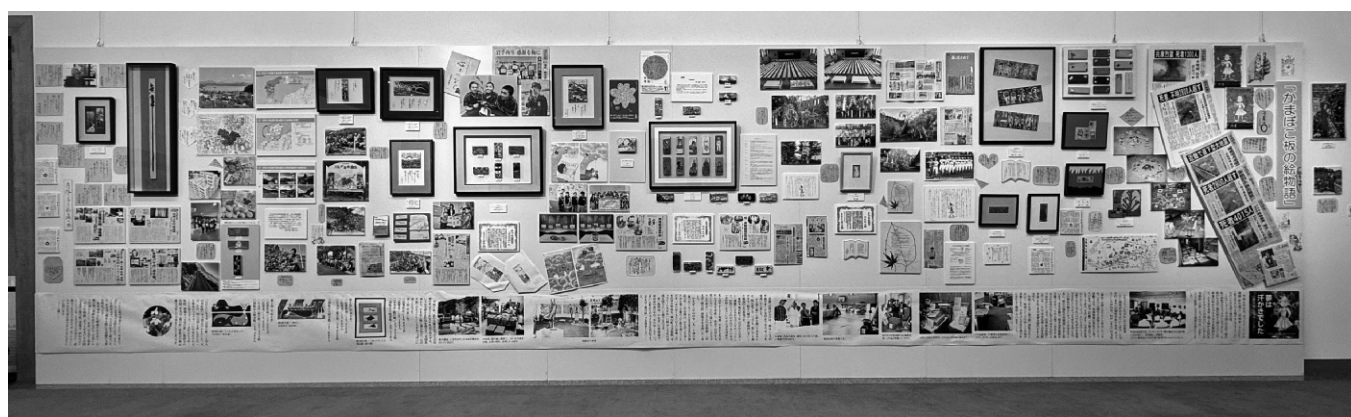
青い島四国、かまぼこの産地南予、山の中の「小さな美術館」からの文化発信です。「かまぼこ板の絵」でお返事ください！

「最初から、全国版で展開するとは、ふとどきな…失敗したら責任を取れるのか！」とか、「絶対に来ない。来てもせいぜい1,000か2,000ぐらいだろう」と批判と非難が轟々だった。

その上に、企画が動き出した途端に阪神淡路大震災。地球が割れたかと思った震災だった。

愛媛でさえ、身動き取れないようなことも沢山起きた。

でも、そんな中、願ったとおり、初めての第1回展に10,891点という作品が届いたのだ。



第30回展「かまぼこ板の絵30年の物語」(筆者が担当)

そんなことのひとつひとつを思い出しながら「30年のあゆみ」を高さ2・4 m幅9・5 mの壁に展示をした。

その中には、阪神淡路大震災から始まり、東日本大震災そして能登半島大震災の被災地との「かまぼこ板の絵」を通して今も続く交流の歴史も、当時の新聞や写真、手紙等で生々しく大事に掲げてみた。

展示をしながら、30年という時間と、その思いの深さや有り難さで、私は何度も泣きそうになった。

そして、最後のシメは108歳の方の作品に「108になっても人生おもしろうてやめられん。毎日新品の日がやって来る」という、その人の言葉を添えた。

能登の子どもたちに
復興みかんを送りたい！

昨年、令和6年の正月元旦、能登半島に大震災が起きた。

「お正月からなんで…こんなことが…」と、テレビの画面を見ながら震えが止まらなかった。

震えながら、頭の中で今までの震災のことがグルグル回っていた。

かまぼこ板の絵展覧会を企画し「いざ出陣！」という時に起きた阪神淡路大震災。

「こんな大変な時に、チラシやポスターを送ってはいけない。」と1枚のチラシもポスターも送らなかつた兵庫県から、全国で4番目に多い応募作品が届いた。それもほとんどが避難所に仮住まいする皆さんからで、作品には「いい企画をありがとう。震災前にしぼし、かえることができました」というお礼の言葉が付いていた。

そのことに大感激の私たちスタッフ4人は、応募者12,100人に「作品をありがとう！」の手書きの手紙を送った。この手紙がみんなの心に届き、この展覧会の基盤を作ったように思う。

次々に報道される感動のエピソードが、溢れんばかりの、湧いて出るほどの来館者と呼んだのだ。

そして、あの東日本大震災。

震災が起きる2時間半前に投函された「かまぼこ板の絵」の作品が、8日後に奇跡的に届いたのだ。それも「万里の長城」と呼ばれた防潮堤が流された岩手県の田老というところの小学校からだった。

それがきっかけとなり、当時3年だった子どもたちが23歳になった今も交流が続いている。

東日本大震災が起きた年の暮れ、「せめて、お炬燵でおみかんを…」と送ったみかんの中にあつた種が苗木になってお里帰り。

そのみかんの苗木が、夕焼け山というみかん園で大事に育てられ、子どもたちが20歳になった年から立派な実をつけてくれ、復興みかん「えがおの木」としてみんなに元気を届けている…ことなどを思い出していた。

能登半島地震の後、秋になったら能登の子どもたちに復興みかんを送ることはできないか…それも私たちができる範囲の量で…と思っていた。

そんな時、大震災で被害が出た能登半島を、また、豪雨災害が襲ったのだ。「なんで、こんなことが起こるのか…」と自然災害の恐さに震え上がった私たち。

「能登の子どもたちに復興みかんを食べてもらいたい。ホッと一息ついてもらいたい」そんな思いが強くなった。

私たち…個人ができる範囲でのみかんを小学校に…と。でも、行ったこともな

い石川県、知人も友人もない…どうすれば…と悩んでいた時、いつもいろんな協力やアドバイスをいただく「全国行政相談委員連合協議会」の白浜事務局長さんが、総務省の石川行政評価事務所行政相談課長の室屋圭亮さんに連絡をしていただき、室屋様はじめ、石川県の行政相談委員さんのご協力をいただけることになった。

ホッと嬉しかった。

交通の便も整ってなく、同じ石川県にいても被災地に行くのは困難で、ままならないような時にすっかりご迷惑をかけ、紹介いただいた輪島市の町野小学校とお隣の東陽中学校に「復興みかん」を送ることになった。

私たちは11月19日にみかんを摘み、箱詰め。22日の夕方、子どもたちが避難通学先から、自分たちの町野小学校に戻り受け取ってくれるという予定に合わせて準備をした。

ひとり1箱、7キロ箱にみかんを詰め、「かまぼこ板の絵展」の作品集や作品用のかまぼこ板、お正月のしめ飾り、フクロウの飾りものなどを入れ、手紙も添えた。

「あの時、小学3年だった岩手、田老

の子どもたちが夢を叶えて立派な青年になつてくれたように、どうぞ夢に向かって頑張ってください」と88歳の藁細工の名工に作っていただいた「藁細工の鶴」を小中学校に添え、32箱のみかん箱を発送した。発送に当たって手伝ってくれたみんなに、

『元旦の令和6年能登半島地震に加え、9月には奥能登豪雨災害が発生しました。

復旧復興に向けて動き出した輪島市町野地区は再び大きな被害を受けました。

子どもたちも、輪島を離れ能登町の小学校にバスで通う毎日。

温かく迎えていただきながらも、寂しさや無力感を味わっています。

今回、復興みかんを送つていただけたことと、子どもたちにも『応援し、心を寄せてくださる方がいるよ』と伝えることができます。心より感謝申し上げます。』という、輪島市立町野小学校の井上校長先生からのコメントを伝えた。復興みかんを届けるためにご協力いただいた皆様、本当にありがとうございます。心からお礼を申し上げます。子どもた



お送りしたミカン箱



箱の中には

ちに食べてもらえ、とても嬉しかったです。

東陽中学校からの作品

かまぼこの絵第30回展の応募締め切りが近づいた今年4月17日、能登半島の東洋中学校から3点の作品が届いたと連絡があった。在校生8人、その中の3人が描いてくれたのだ。

「少しずつ日常が戻り、大好きな枝豆を食べられることに感謝」と「枝豆」を描いた高野礼次さん(2年)。

「復興花火を見て、辛い頃を思い出し



えがおの木(集合写真)



東陽中学校から応募の3作品

たけど頑張ろうと思った」と「花火」の山崎優香さん(3年)

「花冠」の山本愛未さん(3年)は「地震にも負けず咲き続けている花に勇気をもらった」と。

3人の絵に込めた思いが書いてあった。

東陽中文化部の高堂真由美教諭によると、豪雨で校舎が浸水し、隣の中学校を間借りしていた時期で部活動に制約がある状況にもかかわらず、生徒から「やってみたい」との声。「えーえ…かまぼこ板に絵なんて描いたことない」と言いながらも、災害を忘れさせてくれた時間だったそうだ。

今年4月には東陽中に戻ったが、校舎改修のため、2学期からは町野小で授業をスタート。生徒数は8人に減ったが、協力し合って元気に頑張っているとのことだった。

「ギャラリーしろかわ」の森岡館長が「是非、展覧会の表彰式に来て欲しい」と招待の連絡を入れたけど「お気持ちだけ嬉しくいただきます」とのことだったという。

まだ、生徒を連れて愛媛に来られる状況ではないことがひしひしと伝わった。

被災地岩手、田老の当時小学3年だった少年たちと、今から夢に向かって頑張る能登の少年少女たちが出会い、いろんな話をしてもらうことができればいいなあと復興みかん園での出会い作りをしたい…と模索している私たち。

NHKのラジオ番組のおかげ

NHKラジオの早朝に「マイあさ」という番組がある。何年か前までは「朝いちばん」という番組だった。

ラジオ深夜便の続きで、全国各地のいろんな人が聞いておられ、びっくりするような反響のある番組だ。

私も、随分長い間この番組の中で、地域のことを紹介する「マイあさだよりのレポート」をさせてもらった。

かまぼこ板の絵を通しての全国のみなさんとの感動的な出会いや、夢を叶える

ためのお願ひも語り…、その結果の報告もしたように思う。

東日本大震災の時には「こんな時だから、田老の子どもたちに楽しい思い出プレゼントをしたい…愛媛に呼びたい」と、「思い出プレゼント大作戦」という募金活動をしていることを語り多くの方から支援をいただいた。

おかげで、愛媛に、西予市城川に来てもらうことができ…今も交流が続いていること、それが復興みかん「えがおの木」になったことまで、全国各地のみなさんに知ってもらうことができた。

映像がないので話が見えるように喋りたい…と一生懸命だった約10分間。

目のご不自由なみなさんが「貴女の話しは見えるんですよ」と言ってくださった時の嬉しかったこと。

能登の輪島にみかんを送ったことも、その思いも語らせてもらった。

本当に長いこと、早朝にいろんなレポートをさせていただき、私の南予訛りの声を覚えてもらっていることにも驚いた。

今年の2月18日に、「私のふるさと自慢」をして「マイあさだよりのレポート」を卒業した。

本当に沢山の応援や支援をいただき、お心を寄せてもらったことに感謝申し上げます。

私は、もう「ギャラリーしろかわ」に勤務していないのに、ラジオで声を聴くとお訪ねくださるみなさんがあったことも驚きで、嬉しいご縁繋ぎになった。

本当にありがとうございます。

夢は汗かき

「かまぼこ板に絵を描く」という展示会を思いつき、沢山の方のお力を借りて展示会開催に漕ぎつけ、それが30回展を迎えることができたことも「奇跡」のように思う私。

本当に、沢山の方々の人生が板の上に描かれ「感動」というカタチになったこと。昨年は、ミュージカル劇団「みかん一座」の40周年記念公演で、かまぼこ板の絵の物語が「つながる奇跡」というミュージカルになり、多くの人に感動を届けていただいた。

今、私は仲間たちとこれらの感動物語を絵本にしようと、頑張っている。

絵を描いてもらうのは、かまぼこ板の絵を描いてもらっている応募者の方々。

見開き2ページで一話の絵本。一つの話にひとりの絵本作家。多分、こんな絵本は初めてだと思う。

30年という節目に、心から感謝を込めての感動絵本ができれば是非読んでいただきたい。

「この小さな板の上に人生をのせ、どれだけ広い世界を描いてくれるかが楽しみ」と初代審査員長の富永一朗先生がよく言われていた。

女性応募者の最高齢の曽我八千代さんは、「人生、時間が足らなかつたら、長生きしたらいい」と、105歳の人生の締めくくりを「無事」という作品に込め、みんなの無事を願われた。

108歳、茶寿の個展をさせてもらった上堂喜太郎さんは、「108年生きて、人生おもしろうてやめられん」と、私たちに元気を残していただいた。

これからも「知恵と汗」を絞ればどこからでも文化発信ができると信じ、奥伊予城川で頑張っていきたいと思う。

美術館「ギャラリーしろかわ」は希望という巣箱です。

いつでも、飛んできてください。

おわりに：

今回、一番みなさんにお伝えしたいことは、「全国行政相談委員連合協議会」という組織があり、全国各地に「行政相談委員」さんがおられること。

「能登の子どもたちに愛媛みかんを食べてもらいたい」と思っても、それを実現させる手立てがわからなかった。

私たちの願いを実現させてもらったのが、この組織の方々と親切丁寧に対応していただき、私たちの手足となって動いていただいた。

たとえ相談したことが、担当外であっても「どうすればいいか」を教えていただけ。

本当に身近な行政相談委員さんである。「まず、相談！」をと。

「行政相談委員」さんのことをみんなに知っていただきたい。

「復興みかん」を届けていただき、本当にありがとうございます。